

# 古い世界秩序は終わりを迎えつつある — 新しい世界秩序が台頭している

ガザへの裏切りは、21世紀初頭における最も深刻な道徳的失敗の一つである——ホロコースト後の「二度と繰り返さない」という約束を粉々にし、生の力と政治的便宜が国際法の脆弱性を露呈させた、ゆっくりとした見捨て行為だ。2023年10月以降の29カ月間、世界はガザが容赦ない破壊にさらされるのを眺めていた。家屋は瓦礫と化し、病院は標的とされ、子どもたちは飢えに苦しみ、家族全体が抹消された。飢えた乳児、麻酔なしで切断された手足、手で掘られた集団墓地——これらの映像は避けがたく目に飛び込んできた。それでも「グローバル規範の守護者」を自称する者たちの反応は、せいぜい無力な修辭に過ぎず、最悪の場合には拒否権、武器供与、外交的隠れ蓑による積極的な共犯だった。

「二度と繰り返さない」は、アウシュヴィッツとトレ布林カの灰の中から生まれ、600万人のユダヤ人と数百万の他者に対する工業化された殺戮の後、人類の良心に刻まれた誓いだった。それは1945年以降の秩序の道徳的基盤となった：1948年のジェノサイド条約、世界人権宣言、国境や主権を超える人道に対する罪を宣言したニュルンベルク原則。しかしガザで、その約束は砕けた。パレスチナ占領地における人権状況に関する国連特別報告者を含む国連専門家たちは、ジェノサイドに一致するパターンを指摘した——集団の構成員の殺害、重度の身体的・精神的危害の付与、身体的破壊をもたらす条件の意図的付与。独立国際調査委員会は、イスラエル当局が戦争犯罪および人道に対する罪——戦争手段としての飢餓、絶滅、性差別的迫害、強制移住——に責任があると認定した。国際司法裁判所（ICJ）は2024年1月の暫定措置で、ジェノサイド条約で禁止される行為が発生している可能性を認め、イスラエルに対しそうした行為の防止、援助の確保、扇動の処罰を命じた。以降の命令と勧告的意見は、UNRWAを含む人道アクセスを促進する義務を強化し、占領の一部の側面を違法と宣言した。

これらは不明瞭な法的注釈ではなく、世界最高裁判所と権威ある国連機関による拘束力のある宣言だった。それでも遵守は最小限だった。イスラエルは援助を制限・遮断し——UNRWAは停止に直面し、検問所は数カ月閉鎖され、人道回廊は軍事化または民営化されて致命的な混乱を生んだ。2025～2026年までに飢饉状態が再発し、配給は必要カロリーのわずかな割合に削減され、数千人の切断者に義肢が阻まれ、医療避難が停止した。7万人以上のパレスチナ人が殺害され（疾患、飢餓、医療不足による間接死を加えるとはるかに多い）、世界の5人に1人の紛争地帯の子どもがガザを中心とした苦しみの中心にいた。世界は知っていた——リアルタイムの衛星画像、ジャーナリストの報告、NGO報告——それでも説明責任の機構は停滞した。

国際社会の見捨ては制度的だった。国連安全保障理事会は米国の繰り返される拒否権で麻痺し、停戦や人道的一時停止を強制できなかった。即時敵対行為停止、無条件援助アクセス、人質解放を求める決議は——他の加盟国のほぼ全面的支持にもかかわらず——しばしばワシントンの唯一の反対票で阻止された。人道的「一時停止」は提案され拒否され、ICJ命令遵守の呼び

かけは無視された。イスラエルの最も強固な同盟国である米国は、慎重に言葉を選びながら民間人犠牲を非難しつつ軍事援助を継続し、紛争をハマスに対する自衛として描きながら、より広範な包囲と占領を回避した。欧州や他の同盟国は懸念の声明を出したが、具体的な圧力——制裁の延期、武器輸出の継続、外交的承認の維持——にほとんど転換しなかった。

これは単なる不作為ではなく、選択的盲目だった。「二度と繰り返さない」の約束は数十年にわたり選択的に援用されてきた——ホロコースト、ボスニア、ルワンダに対しては正しく——が、ガザでは計算が変わった。政治的同盟、ロビー影響力、戦略的利益が普遍的原則を凌駕した。結果は、開放型牢獄に閉じ込められた民が爆撃と封鎖にさらされ、そうした恐怖を防ぐと主張するグローバル秩序が目を背けたり可能にしたりしたことだった。裏切りは各拒否権、各遅延した輸送隊、各首都からの「思いと祈り」の声明で深まった——行動できたのに選ばなかった。

傲慢は常に代償を要求する。この秩序の設計者たち——第二次世界大戦の灰の上に繰り返しを防ぐ機関を築いた者たち——は、道徳的権威が自己持続的であり、力が法と良心を無期限に無視できると仮定した。彼らは間違っていた。台頭する帝国はしばしば戦場での敗北ではなく、正当性の浸食によって崩壊する。「二度と繰り返さない」が拘束力ある倫理ではなくスローガンになるとき、国際法が選択的に適用されるとき、一つの民の苦しみが地政学的便宜のために許容可能とされるとき、破壊の種が蒔かれる。

今、請求書が届く。それはフランク・ハーバートの『デューン』で予言された不可避の力で届く——権力、資源支配、台頭と崩壊の不可避のサイクルが絡み合い、フィクションではなく予言的に感じられる叙事詩だ。デューン宇宙の三つのメタファーが、現在の地政学的地震を不気味な正確さで梓づける。

まず、『デューンの子ら』のプリンセス・イルーランのエピグラフ：「歴史が我々に教えることが一つあるとすれば、それは単純だ。すべての革命は自らの破壊の種を内に持つ。そして台頭する帝国は、いずれ必ず落ちる。」この冷静な警告は2026年3月の出来事に響く。第二次世界大戦後の秩序——無敵の軍事投射、ドル覇権、選択的道徳的権威——の設計者・執行者である米国は、今、自らの過剰伸張による自傷の傷に直面している。ガザでの無罰への道徳的嫌悪から始まったものが構造的挑戦に転化した：文書化された恐怖の中でもイスラエルへの絶対的支持を主張する帝国の姿勢は、南半球全体に憤りを蒔き、身近な同盟を分裂させた。脆弱な停戦中の首魁殺害、ウクライナやインド太平洋からの防衛システム転用——各エスカレーションがより深い反発の種を植える。2026年2月28日、交渉継続中に最高指導者アリ・ハメネイの暗殺は、残された外交的信頼を粉碎した。個人的・家族的喪失で硬化した息子モジタバ・ハメネイは復讐と持続的抵抗を誓い、パレスチナへの体系的救済なしに停戦を拒否している。イルーランが思い出させるように、歴史は永続的上昇を許さない。米国を超大国に押し上げた仕組みが、今、決意ある非対称抵抗に直面して脆弱性を露呈している。

第二に、ウラジミール・ハルコンネン男爵に帰せられる象徴的台詞：「スパイスを支配する者が宇宙を支配する。」ハーバートの宇宙で、老化防止のスパイス（メランジ）は星間文明の要：寿命を延ばし、意識を拡大し、ギルド航法士が空間を折り畳む。よってアラキスの支配はすべてを意味する。我々の類推では、石油（多少液化天然ガス）がスパイスの役割を果たす。数十年

にわたり米国は流れを支配した——必ずしも埋蔵量直接所有ではなく、海上覇権による航路確保、友好産油国保証の同盟、ドル需要を保証するペトロダラーシステムを通じて。かつて世界石油の約20%が毎日通過したホルムズ海峡は、現代のアラキス要衝となった。イランの実効的封鎖——または厳格制限——、ミサイル脅威、地雷、保険取消しに支えられたものは、その支配を覆した。交通は滴に崩壊、湾岸産油国は貯蔵溢れで生産削減、バブ・エル・マンデブ経由迂回はフーシの新たな妨害脅威に直面。イランが同盟貨物の元・ルーブル決済を試みる中、ペトロダラー自体が揺らぐ。古い秩序の設計者——ワシントンと最側近同盟——は、名目上の支配が流れ自体を中断されれば無意味だと突然発見する。

しかし最も深い洞察は、『デューンの子ら』ミニシリーズ（ハーバートのテーマを反映）での微妙な観察から来る：「スパイスを支配するのは誰かではなく、スパイスを妨害できる能力を持つ者だ。」この逆転が現在の本質を捉える。米国は依然として最大海軍、最先端戦闘機、最深戦略備蓄を誇るが、イラン——ロシア情報、中国経済ヘッジ、代理ネットワークの間接支援——は優位性が妨害にあることを示した。ミサイル連射の継続、ホルムズの絞殺、二次要衝の脅威で、テヘランは帝国が持続的に対抗しがたいコストを課す。米軍需品は数週間で数年分を消費、迎撃機は他戦域から転用、同盟は米国保護サイトが完全に防げない火にさらされ静かに基地協定を再評価。かつて無敵投射の象徴だった空母は、今、極超音速とドローン群の時代に常時脅威下で運用される。ハッターリは見破られた：圧倒的通常戦力は、痛みを耐え非対称消耗を課す意志に屈する。

この清算を点火した怒り——無罰を終わらせるなら体系的崩壊さえ歓迎する覚悟——は、より深い真実を反映する：道徳的疲弊が物質的過剰伸張と出会うとき、落下が加速する。西側の一般大衆は、媒介された苦しみの映像に麻痺・気を取られ、一般ストライキや同意の集団撤回で機械を止められなかった。今、痛みはガソリンスタンドと財布に直接届く。国際エネルギー機関の史上最大400百万バレル放出（2026年3月11日）は数週間・数ヶ月を買うが、妨害継続なら6月後半に枯渇が迫る。原油価格は100ドル超へ（最悪シナリオ135~200ドル）、欧州TTFガス急騰、高税市場で燃料リットル20ユーロ相当が現実味を帯びる。この財布直撃——遠い残虐行為よりはるかに即時的——が、長く欠けていた大規模デモ、一般ストライキ、選挙反乱を点火する。

欧州、特にドイツが脆弱性の中心にある。ベルリンのエネルギーヴェンデ——原子力段階的廃止と石炭削減加速——は輸入ガスと断続的再生可能エネルギーしか選択肢を残さず、電力価格をグローバル化石変動の人質にした。フランスは原子力ベースロードで緩衝、ポーランド・スペインは石炭や強力太陽光で分離、米国・中国・ロシア・日本は多様な国内源に頼る。しかしドイツは急性産業痛、財政圧力、政治的浸食に直面する。メルツ首相の連立は財政正統と揺るがぬコミットメント——ウクライナ援助、ロシア制裁、無条件イスラエル支持——に固執する一方、南部州（アイルランド、スペイン、イタリア）はガザでの道徳的偽善に苛立ち、ハンガリー・スロバキアはロシア輸入緩和による現実的エネルギー路線を推進する。石油危機はあらゆる亀裂を増幅：不均等な痛み分布が拒否権連鎖、政策逆転、EU結束完全崩壊のリスクを生む。ドイツは国内反乱・早期選挙回避のため姿勢を軟化させるか、ブロック分裂の支点となる。

イランの姿勢は妨害パラダイムを強調する。モジタバ・ハメネイへの継承は復讐と戦略的明晰を融合させた。交渉中の攻撃後、出口はない。信頼は破壊された。テヘランは単なるエスカレーション低下ではなく体系的救済——パレスチナ脱植民地化、「シオニスト実体」の解体——を要求し、親イスラエルネットワークとロビー影響に縛られた米国政権には政治的に不可能だ。面子保全の撤退試みはこの極大主義に躓く。体制の数十年準備——ミサイル拡散、代理硬化、通貨ヘッジ——が今精密に実行され、米軍基地を資産から負債へ、同盟を負担へ転換する。

デューンの叡智では、すべての革命は自らの破壊の種を持ち、帝国は正当性なき権力が脆いことを忘れるから落ちる。ガザの見捨ては、その忘却の具現だった：永遠の無罰を仮定した傲慢。代償は抽象的正義の延期ではなく、今進行中の解体——経済的混乱、地政学的再編、かつてルールベース世界を支えると主張した外観の亀裂だ。請求書は満額で提示され、歴史は容赦なく。

現れるのは単なる崩壊ではなく変革：妨害が公平を強いる多極の夜明け、古い秩序の道徳的破産が、乱れながらも新しい啓蒙へ道を譲る。スパイスはもはやワシントンの条件で流れていない。その単純な事実の中に、終わりのはじまり——そしておそらく、ついに、より公正な何かの種がある。